

# 難波西鶴と海之道

【83】

森田 雅也

西鶴の『武道伝来記』(貞享4(1687)年刊)巻四の二「誰捨子の仕合」は、九州島原の話でしたが、複雑になってきました。上意討ちの命をつけた団平と茂右衛門。見軍命を果たしたのは茂右衛門であったのに、団平にだまし討ちにあい、手柄を独り占めされてしまいます。

遺族は藩内において、上意討ちで不覚をとった茂右衛門の家として冷遇されま増を得て、家の栄えた団平でしたが、次第に高慢とな

り、罪のない我が家の使用人をむごい目にあわせ、処刑してしまいます。使用人には残された許嫁がいましたが、団平の悪事を茂右衛門の兄茂左衛門に告げ、自害して果てます。団平は逐電して藩外へ逃げていなくなりませう。

兄茂左衛門は弟茂右衛門の敵討ちをしたのです。自分より自下の敵は当時の敵討ち制度のもとでは討つことが許されていませう。藩の家老に敵討ちの申請をしたものの、特例を許すことはできないと許可されませう。茂左衛門に息子がいれば、名目上は叔父の

敵となるのですが、娘しかいないため、ついに自ら浪人して、団平の跡を追ひ、諸国を尋ね回ります。

すると、2年過ぎた秋の頃、琵琶湖の志賀・唐崎の辺りに団平が潜伏していることを聞き出します。そこで、茂左衛門は逢坂山を過ぎた辺りで偶然、1歳ほどの捨て子を拾います。そこで名を「茂吉」として養子縁組をし、大津の代官所に、この捨て子を名目人として、敵討ちの申請をします。

8月14日、茂左衛門は、うまく団平を誘い出し、見事敵を討ち、本懐を遂げます。その時、茂左衛門は茂吉のために乳母を雇い、とどめをその乳母に抱かせた茂吉の手で刺さるといふ念の入れ方でした。茂左衛門は、団平の首を掲げて、島原藩へと帰って行きますが、茂吉については、山科のたばこ刻みを職業として

## 捨て子と養子縁組し敵討ち

いる男に、十両を添えて養子にやります。

帰国した茂左衛門は、団平の首と敵討ちの首尾を記した大津の奉行の添え状を提出します。何とも見事な敵討ちの制度にのっとったあだ討ちとなりましたね。島原の殿様も武士のかみと上機嫌。二百石加増の上、母衣大将にまで昇進させます。

すっかり武勇の名をあげた茂左衛門でしたが、殿から、「茂吉は、どんな家柄か分からないものの、敵討ちのためとはいえ、一時は茂右衛門の養子とした子、呼び寄せて養育し、茂右衛門の跡を継がせるように」と御意がありました。そこで茂吉を呼び寄せ、めでたい重陽の節句の日にお目見えに預かり、その後、家は栄えたという、誠にハッピーエンドとなりました。

(関西学院大学文学部文  
学言語学科教授)

# 茂左衛門自ら浪人に